「鞄」（「笑う月」所収）

安部公房の全作品を読んだわけではないが、彼の描く世界は「不思議な」というよりは「変な」という形容がぴったりくると思う。

「鞄」で描かれている世界も、時代こそ少し古い印象があるが、私たちの暮らすありふれた日常とさほど違いがない空間のように思える。しかし、そこでは現実にはありそうもないことが、なんの前触れもなく突然に起こる。

ある日、半年以上前に出した求人広告を見たといって「くたびれた服装で、しかし目もとが明るく、けっこう正直そうな印象を与える青年」が「私の事務所」に現れる。「今頃になって，ぬけぬけと応募してきた」理由を問う「私（＝語り手）」に対し、「青年」は、「この鞄のせいでしょう」と言ってのける。その鞄は、「職探しに持ち歩くにはいささか不似合い」で「赤ん坊の死体なら、無理をすれば三つくらいは押し込めそう」な「大きすぎる鞄」で、それが青年の「体力とバランスがとれすぎている」ために青年の選ぶ道に制約を加え、「行き先」を決めてしまうのだという。

読んでいて「そんな馬鹿な」とは思うが、ある種のリアリティを伴うできごとであるが故に、私たちは否応もなくその世界に飲み込まれ、気がつくとそれを受け入れて読み進めてしまう。こうした表現の力というのはたいへんに強力で、読後には、むしろ私たちの暮らす現実世界のほうが「非現実」なのではないかと、一瞬ではあるが錯覚するほどである。

ただ、この「変な」世界で起こるできごとは、どこか分析的な感じがして、数学的なロジック、デジタルな感覚や思考を下敷きにしているように感じられて、これまで読んできた「小説」とは異なるように思う。このよう感じる根拠を「論理的」に説明できない自分がもどかしいが、作中の何にこうした印象を強く持ったかということを記すことはできる。例えば、鞄の中身についてのやりとりが行われた折の「青年」の様子を描いた次の表現である。

青年は小さく笑った。私の額に開いた穴をとおして、どこか遠くの風景でも見ているような、年寄りじみた笑いだった。笑っただけで、別に返事はしな

かった。

「鞄」の中身についてあれこれ想像しているらしい「私」の様子を見た「青年」は、小さく笑う。この笑いは冷笑である。青年には「私」の心中の揺れ動きがクリアに見えているのである。「ひったくりや強盗」のような目で見ているのは、自分(＝青年)に「鞄」の中身を問う「私（＝語り手)」のほうであろうと。しかも、見えていながら、そこには興味を示していない。その冷ややかな眼差しに、センサーか何かのような冷たさ、ひやりとする感覚を覚えたのである。

「鞄」が何を表しているか、ということに関心が行くのが一般的かとも思うが、筆者としてはこうした印象的な表現の卓抜さに息を呑んだ一冊である。